

2 フットィに熱中するオーストラリア人は頑強だ

オーストラリアで最も人気のあるスポーツはフットィと普通に呼ばれるオージーボールのフットボールだ。シーズン最後のグランドファイナルは、10月にメルボルンのクリケットグラウンドに10万人もの観衆を集めて大騒ぎをする。オーストラリア最大のスポーツイベントだ。

そのフットィの競技グラウンドは、長直径165メートル、短直径137メートルの楕円形。ボールも、ラグビーボールと同様の皮製で楕円形。グラウンドの長径の両端に4本のポールを立て、中央の2本の間を蹴りこめば6点、その両脇のポールの間を蹴りこめば1点。この野球場より大きいグラウンドで各チーム18人、両チーム36人で闘うボールゲームだ。ゲームは1クォーター25分、4クォーター100分。グラウンドの中央からキックで開始する。ボールをキックして、あるいは、片方の手に載せ、もう一方の手を拳にしてパンチでボールを飛ばしてパスをしながらゴールに向けてボールを運び、最後はそのボールをゴールに蹴り込むゲーム。ただし、空高くキックしたボールをダイレクトキャッチするとマークと称して、フリーキックの権利が得られるので、このボールを求めて、落ちてくるボールを目掛けて、我先にジャンプして、激しく揉みあう肉弾戦を演じる。試合はキック、マーク、キック、マークを中心にして進行するので、ラグビーやサッカーより激しくスピーディである。もちろん相手の動きを妨害するタックルもある。豪快だ。

オーストラリアでも、他の国でいう「フットボール」、すなわちラグビーやサッカーも盛んであるが、これらにはアキ足らず、あえてオージーボールという激しいフットボールを作り出すオーストラリア人は頑強だ。このスポーツに熱中するオーストラリア人は頑強としか言いようがない。この激しいスポーツを楽しむ観衆も豪快。そしてヤジを楽しむ。

“Couldn't get a kick in a stampede” (チャント取れ。それじゃキックも取れんぞ!)

“Moving with the speed of a spastic yak.” (ヒックヒック走りやがって

痙攣ヤク野郎!)

3 クリケットを楽しむオーストラリア人は楽天的だ

クリケットは、アメリカの野球に似ているがルールも精神も全く異なる。各チーム11人、計22人で対戦するボールゲームである。使用するグラウンドは野球が90度の四分の一円をフェアグラウンドとするのに対し、クリケットでは360度全面を使う。従って大変野放図なゲームとの印象がある。更に、安全地帯としての塁は、野球が1塁、2塁、3塁とホームベースを合わせて4塁あるのに対し、クリケットでは、1塁と本塁のみの2つ。従って、アウトになる可能性も少ない。

ゲームは、ピッチャー=クリケットではボーラーと呼ぶ、が腕を折り曲げずに伸ばしたままで弓なりにして投げる、野球と同じような皮製の硬いボールを、ボートのオールのような平べったいバットでバッター=クリケットではバッツマンと呼ぶ、が打つ。得点は、バッツマンが打ったボールを野手が拾って塁に返してくるまでの間に、バッツマンが走者になって塁の間を行ったり来たりと走って=ランと呼ぶ、その走った回数、すなわち「ラン」の回数を得点とするゲームである。ところで、ボーラーは、バッツマンの後ろに立てるウィケットという的を目掛けて投げる。これに、ストレートはもちろん、山なりであろうがバウンドしてからであろうが、ウィケットに当たればストライク。アウトである。バッツマンはボーラーが投げたボールがウィケットに当たるのを阻止するために打つ。そして得点のために走る。ただし、ボールを打っても、塁間を走る余裕がないと打者=ランナーが判断すれば走らなくともよい。ただし、もちろん得点=ランにはならない。そして、空中に打ったボールを野手がダイレクトキャッチすれば野球と同じアウト。オーバーフェンスは6点。その他、二度打ちなどの違反行為が10種類ある。このようにして、10アウトを相手チームから取れば、攻守を交替する。攻守を一回づつして一イニングが終わる。簡略試合は1イニング試合。本格的国際試合は2イニング試合で行う。素人の簡略1イニング試合で1日、2イニングの本格的国際試合=テストマッチと呼ぶでは、5日もかかる。

クリケットの特徴は、バットが幅広なので、空振りが少ない。フィールドが360

度なので、ボールをダイレクトでキャッチされる可能性が少ない。おまけに塁が少ないので、とにかくアウトになる可能性が少ない。結果として、試合は、いくらでも続く。制限時間=試合時間というものがないから、短くて1日。テストマッチと呼ぶ国際試合になると、熟達の名選手ぞろいで、技術がある、走者、ランの判断もよいのでアウトにならないから、2イニングで5日間もかかる。試合終了までには300ラン=得点、500ラン=得点にもなるのだ。アウトになるのは、たまたま野手の正面に打球が飛んでボールをダイレクトでキャッチされてしまった時、打ち損じて空振りしてボールがウィケットに当たってしまった時などの不運な偶然が起こった時のみで、一定のレベルの選手になれば、こんなことは滅多にないので、滅多にアウトにならない。従って、試合というものはいつまでも続く。不運な偶然が繰り返された時のみ試合は終わる。これがクリケットだ。

ところで、こんなんびりとした試合だから、実質的に対戦している選手はボーラーとバッツマンの2人の間だけ。なるほどボーラーはツイストボールとかスピンドールとかいろいろと投げるボールには工夫を凝らしているが、野手ときたら、チームプレーと言いながら、ボールがいつ飛んでくるか当てがいのだから、のんびりと突っ立っている。よそ見している。ぶらぶらしているだけだ。あれじゃ全く日向ぼっこである。バッツマンも360度どこにでも打てる。その上、当たりが悪ければ走らなくてよい。アウトにならなければ一人で何時までも打ち続ける。従って、打撃チームもバッツマンと1塁にいるランナーを除けば、ベンチでお茶を飲み、サンドイッチを食べ、おしゃべりを楽しんでいる。恋人や家族や友人が応援と称してベンチまでやって来て、勝手勝手によろしくやっている。戦闘などという雰囲気はない。これがスポーツか？ ピクニックと言うべきだ！

オーストラリア人は、老いも若きも、男も女も、このなんとも締めりのないクリケットが大好きだ。しかも、クリケットは人生と同じだと言う。This is not cricket. (これはクリケットじゃない=フェアじゃない)の言い方は、日常生活でしょっちゅう使う言い方だ。人生はクリケットのようなものだと思っ
ている。ということは、人生は、ボーラーとバッツマンだけが、真剣に対戦し、他のものは、勝手気儘に適当に時間を過ごしていればよいのだ。アウト、すなわち、

人生でシクジルののは、不運な偶然が起こった時だけである。たまたま守っている野手の正面に打球が飛ぶ偶然的な出来事が起きたときだけアウトになる。なんとも無策なゲームだ。また、クリケットの勝負は一瞬で決まるとも言う。打球が野手の正面に飛ぶというのは偶然的であろう。人生もその程度に一瞬に決まるのだ！そんな分けて、クリケットを愛するオーストラリア人は、ありとあらゆる点で伸びやかで、こせこせしたところがない。何事にも宿命的だが楽観的なのだ。

クリケットは要するにボーラーが投げたボールをバットマンが打って、ランナーがウィケットとの間を走って得点するだけの単純なゲームだ。だから誰でもが楽しめる。プレイヤーは男だけだが、観客は老若男女プレーする男達を取り巻く誰でもよい。とにかくのんびりしている。ピクニック気分だ。クリケット見物は、恋人同士や家族連れがピクニックするときの格好の口実である。しかも、試合は、昼間の10時頃から午後の4時頃までの健全な時間帯に行われる。途中、昼休み、お茶休みを取りながら、のんびりと、適当に進行する。素人目には時間つぶしとしか映らない。それなのに人気がある。クリケットのルールなんか全然知らない外国人でも、飲んだり食ったりすることが楽しいのであろう、結構見物にやってくる。そんな人は、まずは席に着くとすぐに飲んだり食ったりを始める。いい加減して、それからおもむろに言うものだ。「ねえ、この試合何時始まるの？」(So tell me, when is this game going to start?) 試合は遠の昔に始まっているのに、なんともどかな話、嘘のような本当の話である。

私が尊敬するオーストラリア人の作家、ロバート・トレボーラング(Robert Treborlang)氏は、オーストラリア人のクリケットの観戦法について次のように教えてくれた。

オーストラリアでは、伝統的なクリケットの観戦法は、椅子かデッキチェアに座って観戦する。脚は大きく開いて伸ばす。右足は左足の上に乗せる。あるいは、左足を右足のくるぶしの上に乗せる。背骨は、後ろに傾け、腹は楽にして力を抜く。肩は後ろに引いて硬い背もたれにあずける。前屈みで観戦する人はまだオーストラリア人クリケット観戦法の心得ができていない。頭はまっすぐ、顎は引い

て、眼は軽く開いて伏し目がちにする。手は膝の上。通常は、何かを掴んでいる。左手に食べ物、右手に缶ないし瓶ビール。両手で楕円形を作るようにして、手先が軽く触れるようにする。この姿勢は嚴重に維持されなければならない。このような姿勢で座れば、ごひいきのチームが遥か向うにいても、一緒にプレイしているような気分になれる。この姿勢はがちっと固めて微動だにしないことが肝要。一瞬たりとも集中力をそぐような動きはしてはならない。その姿勢でびくりともせずに座り続けて2時間、対戦する両サイドの選手をじっと見守る。うっかり集中力を欠いてよそ見でもしようものなら、その間に大負けを喫することがある。
(*Australian Zen* by Robert Treborlang, P.25)

気分がのったら、次のようにヤジを飛ばす。

“This is not cricket. It's organised loafing!” (これはクリケットじゃねえ。みんなでサボッているだけだ!)

“You haven't got a hope in hell.” (お前さんは本当に下手くそだね)

4 ゴルフを愛するオーストラリア人は成熟した自然人だ

ゴルフは、オーストラリアでは大変人気のあるスポーツだ。国民、すなわち、都会人も田舎っぺも誰でもがゴルフを楽しむ。ゴルフ場は、人の住んでいるところなら、どこにでもあるというくらいで、5ドルから20ドルの低料金でプレイを楽しめる。大学のキャンパス内にゴルフ場があるのも珍しくない。こう言うところではもちろん使用料はない。無料だ。クラブやボールの道具も4、5ドルのデポジットを払って借り出し、使用后返却すれば、デポジットは戻るからタダだ。そこいらの公園のテニスコートでテニスをするのと同じ手軽さなのである。私の知合いの牧場主の親父さんなどは、自分の牧場で、ホールもない牧草地を適当にボールをクラブで打って楽しんでいる。そして、これがゴルフだと言い張る。

最近ではゴルフは日本でも普及して誰でも知っているからプレイのルールなどはここでは説明しない。が、そのプレイ、楽しみ方は、日本人が考えているのと大

いに異なるので、簡単に説明しよう。

オーストラリア人は、ゴルフは一人で楽しむものと思っているらしい。日本人の芸能人グループのように、わいわいがやがやドタバタ騒ぎをしながらゴルフを楽しむとか、ケチなサラリーマンのように、朝夜明け前の暗いうちに家を出て、コースでは競争でもするかのように走り回るゴルフ姿などは見たことがない。週日でも日曜日でも、グループではなく、一人でクラブのバックをカートで引いて、のんびりと静かに一人でゴルフを楽しむ姿ばかりである。せいぜい恋人同士かご夫婦かというペア、カップルのプレイヤーだ。4人グループなど滅多に見ない。彼らにとってゴルフとは静かに孤独に自然を楽しむものなのだ。もちろん時間制限はない。日本の日曜日のゴルフ場のように、4人のグループを3分おきに出発させるようなせかせかゴルフとは大違いだ。彼らには全く理解できないであろう。クラブハウスを好きな時に出かけて、暗くなるまでに戻ればよいのだ。少なくともゴルフは、時間を気にしながら、また、はしゃぎながらするスポーツではない。

ゴルフはオーストラリア人にとっては自然を楽しむものなのである。原っぱがあればゴルフ場として彼らには十分なのだ。確かにゴルフ場はどこにでもあるのだが多くの場合決して立派なものではない。ゴルフ場とその外の敷地との間に柵すらない場合がある。もちろんコースの境目も明瞭ではない。フェアウェイ、ラフ、その外のブッシュとの区別もしかとはわからない。多分彼らにとってはそんなことはどうでもよいのだ。

さて、こんなコースだから隣からボールが飛んでくることもある。われわれのような素人なら、こっちから隣のコースに打ち込むこともごく普通のことだ。要するにゴルフとは、ボールをクラブで叩きながら草地を歩き、大自然の中で、大気を一杯に吸って、太陽と風と草木の香りを満喫する時間を過ごすスポーツだ。人間との係わりをすっかり忘れ、自然に浸るひと時なのだ。ゴルフの醍醐味は大自然の真っ只中で、審判も観衆もいない自然の中で、自分が打ったボールを自分で歩いて捜し、こんなどうでもよい行動をしながら、10キロメートルも自然の中を歩くことなのだ。オーストラリアでは、賞金稼ぎの見せるためのプロゴルフは

いざ知らず、市民のゴルフは、一人で自然を楽しむスポーツと決まっている。だから、こういうゴルフを愛するオーストラリア人は、大自然の中で一人で人生を楽しむことができる、静かで成熟したゆったりとした大人なのである。

ところで、下手くそなゴルファーには次のように声をかける。

“Killing a snake?” (蛇でも殺してるんか?)

“I think you've shot your bolt.” (間抜け! テメエの金玉打ったな!)

5 水泳を楽しむオーストラリア人は自己管理の名人だ

水泳もオーストラリア人の大好きなスポーツだ。が、これもご多分に漏れず、日本人の楽しみ方とは随分と異なるものである。各家庭でプールを庭先に備えて、毎日、起床直後や、一日の仕事が済んだ夕方などに、日本人ならさしずめ「一風呂浴びるか」という気分で、自家用プールで水泳を楽しむ。要するに水泳も一人で楽しむもので、せいぜい家族で泳ぐもの、プライベートなのである。泳ぐスタイルや速さなどは問題ではない。全身を水に漬ける楽しみを味わうのだ。日本人が温泉を楽しむのと同じだ。プール内でじっとしている人、歩いている人、水に身体を浮かせてくねらしている人、思い思いで水浴を楽しむ。当然、こう言う人にとっては、競泳などは思いも及ばない。プールでの水浴は、一人でする、気分転換、気晴らしであり、あるいはシャワーの代わりなのだ。

もちろん、競泳のためのスイミング教室も盛んである。特に子供達のための水泳選手養成クラブには、ストップウォッチを片手に持って、プールサイドを選手と一緒に رفتり来たりしながら、選手に罵声を飛ばす、厳しいコーチがいる。日本と同じだ。クラブの子供達は、学校へ行く前、あるいは帰ってすぐの夕方に厳しい練習に励んでいる。私は、そういうチームのコーチを知っている。大学の先生で、勤務の傍ら、毎朝、毎晩、コーチのためにプールに通っている。だが、このようなクラブは例外で、一般市民は、自分の家で思い思いに水泳、いや、水浴を楽しんでいるのだ。

日本では、プールは、公共の共同利用施設が普通で、各家庭での個人持ちは見かけない。オーストラリアでは、メルボルンほど南下すると、プールのある家は珍しいが、シドニー以北なら、ちょっとした家庭ならプールを持っている。例えばシドニーの北郊外、やや、高級な住宅街の一戸建ての家なら半分以上を越える家庭がプールを持っている。ステータスシンボルというより、ごく当たり前の家庭の庭の一部に過ぎない観がある。大きさもまちまちで、15メートルから20メートルの長さがいいところ。競泳用ではないから、当然レーンを区切るラインはない。一般家庭の家の作り方として、家の周囲は芝生が普通だが、プールは裏の芝生だ。オーストラリア人に大好きなホームパーティなどに呼ばれれば、表の玄関に入って、挨拶をすると、すぐ家の中を通り抜けて裏庭に案内される。と、そこにプールがある。プールサイドがパーティ会場で、みんな水着になっていて、しばしば客を迎えるパーティのご主人まで水着で、プールサイドで日光浴をしながら、飲んだり食ったり、おしゃべりを楽しむ。これが彼らのホームパーティの典型なのだ。

各家庭でプールを持つというとなかなか優雅なように思われるが、これも見かけほどではない。プールの管理には結構手間がかかる。私が1989年に10ヶ月ほどシドニーに滞在した時、プール付の家を借りて住んだのだが、家を借りる条件、すなわち、家の管理についての指示がいろいろとあった。中でもプールの管理が最も厄介なものであった。何ととっても溜まり水だから腐らないように管理する必要があるわけだ。四六時中水を循環させて、フィルターリングを欠かさないこと。三日と空けずカルキのような指定の消毒液を指定の量、指定の期日に入れること。その他、水の表面の木の葉のようなゴミや底に沈んでいるミミズの死骸などを網で掬いとり取り除くこと。もし、少しでも油断して、アオカビでも生えようものなら一大事。プールの水を全部抜いて、ブラシでプールの壁面をごしごし擦り取って洗い落とし、完全にカビを取り除いて、それからまたまる一日以上もかけて水を入れなおさなければならない。事実、私は、一週間ほどの旅行に出かけた時、ちょっと油断して、その間、誰にもプールの管理を頼まず、放っておいたら、帰ってきて、恐れていた通り、アオカビが生えていた。帰宅の翌日に、裸になって水を抜いたプールに入り、一日中かけて、プールの壁面をブラシでごしごし擦るプール洗いをしなければならない羽目になった苦い思い出がある。こ

んな時は、プール管理の業者に頼んでゆかなければいけなかったのだ。プールを持つことは、犬、猫などのペットを飼うのと同様、管理にはとっても気を使うものである。オーストラリア人は、この手間をかけて自分の家の庭にプールを持って水泳を楽しんでいるのである。もちろんそのお陰でプールの管理屋さんも繁盛しているのだが。オーストラリアでは、プール管理の広告は、新聞の三行広告の最もポピュラーなものだ。

水泳は、オーストラリア人にとっては、水の中で身体を動かすことを楽しむものである。タイムレースではない。裸になって、陸上とはまったく違う、まったく次元の異なる身体の動きを楽しむものなのである。もちろん夏の暑い時に水泳を楽しむ人は多いのだが、だからといって、暑いから身体を冷やすために泳ぐというものでもない。彼らは、季節を問わず、年中相変わらず、冬でも、日課として水泳を楽しむのだ。水中散歩といった感覚であろう。そんな分けて、水泳を楽しむオーストラリア人は実に伸びやかでしなやかなのである。

ただし、競泳は、彼らが家庭で日常的にする水泳とはまったく別物であるから、競泳の選手へのヤジは厳しい。

“Couldn't win if he started the night before.”（前の晩に飛び込んだって勝てねえじゃねえか）

“He couldn't go two rounds with a revolving door.”（回転ドアでも2周りも廻れねえ）

参考文献

1985 *How to Survive Australia* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney

1987 *How to Be Normal in Australia* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney

- 1989 *How to Make It Big in Australia* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1991 *She Vomits Like a Lady* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1991 *Staying Sane in Australia* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1992 *Men, Women and Other Necessities* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1993 *How to Mate in Australia* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1994 *The Little Book of Aussie Insults* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1994 *The Little Book of Aussie Wisdom* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1995 *The Little Book of Aussie Manners* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1998 *A Hop Through Australia's History* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1999 *Australian Zen* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1999 *Only in Australia* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney
- 1999 *Sydney: Discover the City* by Robert Treborlang, Major Mitchell Press, Sydney